

で過ごし、ヤンマー発動機船で広東第一陸軍病院に後送され、レントゲン撮影・精密検査を受けた結果、病名は外痔瘻と決められた。二十日後さらに広九鉄道で、香港陸軍病院に転送された。

さすが英国軍が使用していた軍病院で、八階建鉄筋コンクリート造り、多勢の従軍看護婦が快活に働いていた。ここで順番を待つて数日の後執刀、約二ヵ月療養に専念し、軍医に懇請して退院することが出来た。そして広東の練成隊で体力の回復に務め、広東、佛山、三水の要衝の警備に就いた。

当時我が南支軍は、対米戦必至を想定し、広西省梧州より反転していた。私は広東省海豊市で我が中隊と懐かしの合流が出来た。

その後、海岸線の洞窟陣地掘削中の八月十八日、我々にはこの日「終戦の勅語喚発せらる」との命令に依り銃を納めることになり武装解除、集中営捕虜生活数ヵ月を経て、昭和二十一年四月二十三日、浦賀に復員することが出来た。時にポツダム特進の一階級の進級があった。

## 足 跡

神奈川県 岩 淵 清之助

昭和十七年九月七日、第三乙種の私にも召集令状がきて、新潟県村松にある東部第六十八部隊に入隊。仲間は、大正十年生まれの者が多かったたので、現役兵より八か月ぐらい遅れたことになる。三か月間は雨の日も無い猛訓練の明け暮れ、自分の体力の限界まで発揮したつもりである。

軍人精神も全く判らないまま夢中で過ごした村松の教育隊を、十一月には別れを惜しむ気持ちで、一路千葉佐倉の連隊に転属した。佐倉では少々暇もでき、郷里の宮城県からの面会もなかったが、あわただしい日課であった。

十二月、我々の転属組は営庭で何列かに並ばされた。私は何とはなしにある列の後についた。ところが、私の列は南支、大部分の列は中支要員と決められた。軍

隊は員数というが、外地の部隊までただ数だけで決められる。勿論、我々の希望や意志が通らないことは当然かも知れないが。仲の良い戦友は隣の列、生木を裂かれる思いだ。しかし転属者、しかも初年兵はこのように配属部隊が決定する。結局、並んだ列がその者の運命を、生死を決めてしまふのである。

このようにして私達は、佐倉―品川―門司と軍用列車の窓の鑑戸をしめ、外部と遮断されたままの輸送で、十二月二十四日乗船、高雄で敵潜水艦を退避し、全速力で東広の黄埔へ入港したわけです。

翌元日に上陸し広州駅着、独立歩兵第六十六大隊第三中隊に編入されたのだが、まず驚いたことは、元旦というのに班内では蚊帳を吊っている（マラリヤ予防のため）。また、市内の不潔なこと、民族性の差違か、これから何年こんな所で奉公するのかと思うと心細かった。

一月八日と記憶するが、私は坂入隊山本隊第一分隊の小銃手となった。広東市東山に駐留し、初めて演習に参加したころは、北国育ちの私にとり暑さには全く

参りました。軽装とはいえ、気候にも馴れず、体調不十分の中で訓練も猛烈の度が加わる一方。内務班には古参兵が待っている。内務教育はそれ程厳しくは感じなかったが気候に馴れるまでは本当に弱りました。

二月十一日紀元節の黎明、広州湾進駐陽動作戦に参加のため敵前渡河、私の山本小隊は尖兵となり、約一個分隊が工兵の漕ぐ小船で一番先に上陸するのです。対岸の敵から猛烈な射撃、何しろ初めて敵弾が飛んで来るのです。然も真夜中である。主力の乗る大きな船は月明かりで敵の目標となり、集中攻撃の的となる。

工兵が素早く、岸近い泥州に乗り上げる飛び降りたが腿まで泥につかる。夢中で這い上がり右も左も判るはずがない。小隊長や分隊長が指示をしている。夜襲だから大きな声は出せない。何しろ初めての敵弾、初めての経験です。これが実戦かと思うと心細く感じました。

私達が上陸する寸前に西村中尉が重傷、二日目には岡乗少尉が負傷、何せ一週間のうち五名近くの指揮官が負傷する始末でした。

とに角、初日は敵弾がどの方向から飛んでくるか、全く見当がつかぬのが実情でした。三日経ち、四日経つうちにどうやら気持ちも、弾にも馴れたようでした。最後に目的を達して引揚げる時も後衛尖兵でした。陣地に藁人形を立てて人間に見せて夜中に一挙に引揚げるのですが、その時の気分といったら。何しろ敵も増加し、正面の山からこちらを包むように見ている中の引揚げです。

戦闘経験としては、この初陣がいまだに忘れることが出来ません。

昭和十九年六月、湘桂作戦で部隊は前衛となり行動発起したのですが、私は、本部田中中尉の将校伝令として三埠を攻略、同年九月、梧州攻略戦に参加、十一月頃部隊は南寧の東方貴県城に移駐して敵の反撃に備えていました。

その後、田中中尉が第一中隊長として転出、私は中隊復帰が内定していましたが、前小隊長の山本少尉が部隊副官として来られたので、また将校伝令となりました。当時、副官は作戦中の無理で健康を害していた

ため、新任務のため北上する部隊と分かれ一時入院、回復次第部隊追及することとなり、付添いとして潯州へ下り、さらに柳州へ前送したのです。しかし、肺結核の診断が下され、加えてマラリヤに罹患したのですが、副官と私は部隊と行動が出来ればと、病院最終の撤退まで頑張っていたのです。

その間、毎日の空襲、銃爆撃に悩まされていましたが、ある日退避壕が銃撃され、私は鼻の下に瞬間、熱い衝撃を受けました。無造作に手を当てると、手に血が、これは機関砲の弾が鼻下をかすったのです。考えて見れば冷や汗ものです。若し、一センチ内側だったら、私の顔は半分えぐり取られてしまったことでしょう。

それから柳江渡河・雒容・荔浦・桂林・紀陽・衡山と転送されましたが、漸く七月、強引に退院、部隊に戻るべく衡陽まで戻りました。そこで、六月上旬から部隊に多数の犠牲者を出したことを知りました。

私達は二人だけで最後の貨車に乗り全県へ、さらに貨物自動車で大溶江口の激戦地で復帰したのです。私

の先輩や同僚が何人も戦死・戦傷していました。私が若し中隊と行動していたら恐らく、戦死・傷の仲間入りをしていたことと思います。このように軍隊とは、部隊配属も、佐倉の営庭で他の列に並んでいたら？。初陣の作戦で？。湘桂作戦で？。退避壕の空襲で？更に、多数の戦友と共に第三中隊第一小队に所属したら？。「軍隊は運隊だ」では片付けられない数奇な運命によって生死が別れてしまうものだ、と今でもつくづく感じています。

昭和二十一年六月、漸くにして鹿兒島に上陸復員することができたが、鹿兒島は戦災のため焼けただけでした。以来、もう四十余年、私は戦後、何か一つ心のささえとして書道を学び、書道を通じて人間性の開発をと思っています。軍人の時は軍人精神に徹するよう教育を受け、今その時培われた根性を以て、勤務のかたわら三十余年間、書道にかじりついています。書により修業、人柄の錬磨等師を通じ精進しています。

私は私なりに、自分の希望をとげ自己満足していますが、戦場で我々に代って犠牲となられた戦友の御遺

族のことを思い、毎年の慰霊祭に欠かさず参列させていただいています。この平和な今日あるのは、亡き戦友のお陰だと痛切に感じ、生ある限り永久に続けてまいりたいと決意を新たにしております。

## 通信兵の想い出

—湘桂に戦う—

神奈川県 浅井洋雄

思えば昭和十七年九月、新潟県村松東部第六十八部隊に召集、麦飯で激しい訓練を受け、キャシャな身体も結構体力を付けられた。十一月には千葉県佐倉東部第六十四部隊に転属、十八年一月元旦、南支黄埔に上陸したのである。我々は内地帰還の古参兵の交代要員だった。

独立歩兵第六十六大隊に転属、広東河南の第二中隊に配属され、二か月余の現地教育を受けた。後に、無線通信教育のため通信隊に入隊、ここでは初歩教育、